

Title	ベルクソンにおける笑いの苦み
Sub Title	Amertume du rire chez Bergson
Author	西山, 晃生(Nishiyama, Teruo)
Publisher	慶應義塾大学倫理学研究会
Publication year	2016
Jtitle	エティカ (Ethica). No.9 (2016.) ,p.65- 83
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12362999-20160000-0065

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ベルクソンにおける笑いの苦み

西山晃生

はじめに

ベルクソンの『笑い』（1900）を最後まで読んだ者は、その結論部に当惑を覚えるかもしれない。末尾に置かれたセクションで、突如笑いの否定的な側面が強調され、それに対するフォローが何もないまま全体が閉じられてしまうからだ。ベルクソンによれば、笑いのうちには「苦み」（R 153）があるのだという。しかし、この「苦み *amertume*」が正確には何を指すのか、必ずしも明らかではない。笑いを「小さな謎 *petit mystère*」（R 157）と呼んだベルクソンは、この点でわれわれに大きな謎を残したわけだ。本稿の目的は、『笑い』が対象とする「おかしさ」の構造を読み解いたうえで、この謎めいた結論部に何とか解釈の道筋をつけることである。第1節ではベルクソンの方法論について、第2節では、『笑い』においてベルクソンが最も重視する笑いの社会性について論ずる。こうした準備を経て、第3節で笑いの「苦み」の解明に挑む。

第1節 方法について

ベルクソンが直観を哲学の方法として確立したのは「形而上学入門」（1903）以降である。しかし、それ以前の著作である『笑い』において、直観の先取りともいえるような方法が用いられている。本節では「形而上学入門」以降の著作と『笑い』におけるベルクソンの方法を確認する。そ

して、ベルクソンの方法から、笑いを社会的なものとして理解する視点が導かれることを示す。

1-1 方法としての直観

動きから止まったものを取り出すことはいくらでもできるが、止まったものをいくら組み合わせても動きをつくりだすことはできない (PM 213)。したがって実在するもの、つまりすぐれて存在するものは、永遠不変の何ものかではなく、動きであり変化である (PM 211)。哲学が実在を探求するためには、静止したものから出発するのではなく、動きそのものを直接とらえなければならない。実在とそれを探求する方法に関するベルクソンの根本的な発想は以上のようなものだ。

他方、彼はわれわれの生活がこれとは全く異なる物の見方を要求することも知っている。日常生活に求められるのは、自己への、そして自己を取り巻くものへの見通しを保つことである。そのため、絶えざる変化はそれ自体としてではなく、何か不変の枠組みを通じて把握される必要がある。その枠組みを提供するものが概念に他ならない。概念は本性上一般的なもの、抽象的なものであり (PM 187) また「出来合いの *tout faits*」 (PM 206) 形で与えられる。そのことによってわれわれの選択を助け、行動を有利なものにする。既存の「安定した」 (PM 212) 概念に依拠し、ある程度決まりきった形で事物をとらえるほうが生存上有益である以上「日常生活において、諸概念の並置と配合によって事を進めるのは自然であり、正当でもある」 (PM 199)。

さて、ベルクソンにとって問題は哲学が他の出発点を取り得なかった (PM 48) ということにある。こうした「実践的有用性を目的としてわれわれが日常用いているやり方」 (PM 212) は、実在的なものの探求にもそのまま適用されてしまう。哲学は「経験の外で、純粋な概念に依拠して仕事をする」 (PM 48) ことしかできないのである。このやり方を取る以上、

哲学は「永遠の」(PM 14)、つまり変化を容れない実在を目指すよりほかない。

……こうして形而上学は諸事物の実在性を、時間を超え、運動するものと変化するもののかたに、したがってわれわれの感覚や意識が知覚するものの外側に求めるようになった。そうなると形而上学は諸概念の多少なりとも人為的な配置、仮說的構築であるよりほかなかった。形而上学は経験を超えると自称した。しかし、実際には経験は動いており充実したものであり、さらに掘り下げることのできるもの、したがって新たな発見に満ちたものである。形而上学はこうした経験を、固定され無味乾燥で空虚な抽象物によって、つまり経験からというより経験の最も表面的な層から取り出された抽象的な一般概念の体系によって置き換えることしかしなかったのである。(PM 8-9)

哲学が永遠のものを目指す以上、用いられる概念は（動きや変化を受け入れないのだから）「すべてを含み、あらゆるものを演繹する元になる」(PM 48) ものである。しかし、そのような概念は、個々の事物を示すには「広すぎる trop larges」(PM 1)。そして、その広大さは空虚さと等しい。

それら〔諸々の哲学体系〕は絶対的なものに名をつけることで、それについてわれわれに教えた気である。しかし……言葉は一つの事物を指示するとき一定の意味を持つので、あらゆるものに適用されるや否や意味を失う。……語の外延を増すほど、その内包は減ずる。(PM 49-50)

概念が一般的になればなるほど事物の具体的な相をとらえ損なう。ベルクソンが「哲学に最も欠けているのは正確さ *précision* である」(PM 1) と断言することによって示すのは、まさにこのような事態である。正確さ

の欠如は、「事物を広大すぎる *trop vaste* 類へ包摂する」(PM 23) ことを指すからだ。したがって「哲学をより高次の正確さへともたらす」(PM 70) ためにはまず、「すでに出来上がった概念を斥ける」(PM 23)、あるいは「記号と手を切る」(PM 219) ことから始めなければならない。そのうえで「動くもののうちに身を置き、諸事物の生命そのものを取り入れる」(PM 216) こと、そうすることで「対象の本質的かつ固有な面」(PM 187) をとらえることが求められる。

たしかに哲学は概念を欠かすことができない。しかし、ベルクソンが提唱する概念は「出来合いの」ものではない。それは対象の変化を忠実にとらえ「対象の大きさにぴたりと合わせて裁断された」(PM 23) 概念、「その対象のみに適合する概念、この事物だけに適用されるためほとんど概念とはいえない概念」(PM 197) である。こうした「しなやかな」(PM 188) 概念を形成するための一連の努力が「直観」に他ならない。

1-2 『笑い』の方法

『笑い』においても、ベルクソンは哲学を批判する。同書でベルクソンが対象とするのはおかしさによって引き起こされる笑いである。笑い、あるいはおかしさを生む「喜劇的空想力 *fantasie comique*」(R 1) などを、哲学者たちは一つの定義に閉じ込めようとしてきた (R 1, 155)。そしてそのことによって失敗し続けてきた (*ibid*)。

驚くにはあたらな。おかしいことは、ただ続けられるというだけでその効果を失う (R 30)、つまり笑えなくなる。単独ではおかしくもなんともないものが、並べられたり繰り返されたりするだけで笑いを引き起こす (R 25-8)。また、われわれはおかしいものとまたま似ているもの、偶然関係するものをも笑うことがある (R 156)。何より喜劇というものが存在し、おかしさは新たにつくりだされる。これら容易に観察される諸々の事実が、定義という方法の失敗を明らかにする。「喜劇的空想力」は

「生きているもの *quelque chose de vivant*」(R 1) であり、笑いのあり方は状況によって絶えず変化するからだ。

また、定義というものは一般的に「広すぎる」(R 101, 155) ため、笑いに固有な特徴をとらえられない。例えばおかしさを、予想外のことが起きたり正反対の特徴を持つものが同時に現れたりした場合にもたらされるものだと考えたらどうだろうか。もちろん、そのように性格づけられる事態に直面したとき、われわれが笑うことはあり得よう。しかし、おかしさを「不意打ち」や「対照」によって十分に説明することはできない。なぜなら、それらは「われわれに笑う気を起こさせない多くのケースにも適用されるような定義」(R30) だからである。

仮にこれらの点が解決したとしよう。われわれが認めるありとあらゆるおかしさを過不足なくカバーするような定義が奇跡的に見つかったと考えてみよう。それでもなお笑いの説明としては不十分であるとベルクソンは考える。

……たとえそれら〔諸々の定義〕が現におかしさのあらゆる形に適合したとしても、なぜそのおかしさがわれわれを笑わせるのか少しも説明しないだろう。実際、他のどのような論理関係もわれわれの身体を反応させないのに、この特定の論理関係が、覚知されるや否やわれわれの体を伸縮させたり震わせたり *nous contracte, nous dilate, nous secoue* するのはなぜだろうか。(R 6)

笑いとは身体反応なのであり、おかしさがなぜわれわれに特定の具体的な身ぶりを取らせるのか、そのことを解明しない限り、笑いは「他の人間活動とは関係のない、奇妙で孤立した現象」(R 6) になってしまうだろう。とはいえ、ベルクソンがなそうとしているのは、おかしさを見出したときに特定の身ぶりを生じさせる生理的メカニズムの研究ではなく、その意味の解明である。つまり、われわれは笑うことによって一体何をしてい

のか明かすことが目指される。そのために必要とされるのは、笑いが生みだされる場に寄り添うことである。笑いを生む空想力に関してベルクソンは次のように述べる。

われわれは、それ〔空想力〕が成長し、開花するのを見るだけにとどめよう。ある形態から別の形態へと、それは気づかれなほどの諸段階を経て、われわれの目の前で風変わりな変貌を遂げるだろう。われわれは、自分が目にするであろうどんなことも軽んじないつもりである。恐らく、この途切れることのない接触 *contact soutenu* から、われわれは理論的定義よりもずっとしなやかな何か、長い友達づきあいから生じる認識と同じような実践的で親密な認識を手に入れることができるだろう。(R 1-2)

『笑い』の議論が多くの面で方法としての直観を先取りしていることは、すでに明らかである¹。両者はともに (1) 変化するものをとらえるために (2) 出来合いの、一般的で幅広く多くのものに当てはまる道具立て (概念、定義) を用いたので (3) 対象の固有性を過不足なく説明することができなくなっている、という点で哲学を批判する。それに対して (4) 対象の動きそのものに身を置き、(5) その対象だけにぴったりと合致する「しなやかな」あるいは「親密な」認識を追究する、という点も共通している。そのために彼が『笑い』において目指すのは「おかしさの制作方法」(R 156) を明らかにすることである。しかし、ここでは、それと「同時に」なされることに注目したい。

付け加えるなら、私は笑えるもの *risible* の制作方法を決定しようとしたのと同時に、笑うとき社会が何を意図したのかを探究した。……例えば、『不調和』が不調和である限りにおいて、それを目撃した人に笑いという特殊な現われ *manifestation* を引き起こすのに、他の多くの

特性は、美点であれ欠点であれ、見る者の顔の筋肉に全く変化を引き起こさないのはなぜか、私にはわからない。したがって、おかしきの効果を生む不調和の特殊な原因を探究する仕事が残されている。そして、それが本当に見いだされるのは、このような場合に、なぜ社会は自ら姿を現さなければならないと感じるのか、その原因によって説明できるときに限られるだろう。(R 157、強調はベルクソン)

笑いを生むものだけに合致する「特殊な原因」を知るためには、その原因に社会がどのような形で関わっているのかを明らかにしなければならないという主張である。笑いの理解に「正確さ」を求めるならば、笑いを社会という場に置くしかない。笑いを社会的なものとしてとらえるのは、ベルクソンの方法論からの必然的な帰結である。

1-3 笑いの三兆候

笑いはあるときに引き起こされ、別の場合には生じない。両者を分ける「兆候」(R 3) が三つあるとベルクソンは述べる。第一のものは笑いの対象(笑われる側)に関わる。われわれは人間的なものしか笑わない(R 2-3)。たとえ人間でないもの(物体や動物)が笑われるとしても、それは「人間との類似によって、人間がそれに刻み込んだ印、あるいは人間がそれをを用いる仕方」(R 3) によってである。

第二の兆候は笑う側に関わる(R 3-4)。われわれは対象に「共感」(R 4) を覚えたり、憐れみをかけたり、愛情を抱いていたりするとき、その対象を笑うことができない。言い換えれば、笑うためには対象への「無感動 insensibilité」(R 3) を貫き、徹底的に「無関係な傍観者」(R 4) でなければならない。心を動かすということが笑いにとって「最大の敵」(R 3) である。もちろんわれわれは親しい者、愛する者を笑うこともある。しかし、彼らに向ける感情と笑いが同時に成り立つことはない。「……一

瞬でも愛情を忘れ、憐れみを沈黙させる必要がある」(R 3)。

第三の兆候は、笑いが生じる状況に関わる (R 4-5)。孤独な精神にはおかしさは感じられないし、孤立した身体に笑いは生じない。「どれほど率直 *franc* だと考えられても、笑いは現実の、あるいは仮想の他の笑い手との合意、あるいはほとんど共犯といえるような底意 *arrière-pensée* を秘めている」(R 5)。したがって「われわれの笑いは常に集団の笑いである」(*ibid*)。

三つの「兆候」の意味を考えてみよう。これらはすべて社会性とかかわる。つまり (1) 人間どうしの関係のうちで (2) 特定の相手からは冷静に距離を取り (3) 不特定の相手と態度を共有するという条件のもとでのみ、笑いは生じる。これらの「予備的考察」(R 6)によって、笑いの「本来の環境」(*ibid*)「笑いが生みだされる場」は社会であることが示される。しかし、この段階ではまだ、その場に「寄り添う」準備ができたに過ぎない。次に、笑いをもたらすおかしさが、社会の中でどのように形成されるかを見よう。ここでは「平衡」が鍵になる。

第2節 平衡と矯正

『物質と記憶』(1896)以降のベルクソン哲学において、「平衡 *équilibre*」は極めて重要な意味を持つ。『笑い』においても、おかしさの本質を解明する上で欠かすことができない。われわれの見たところ、ベルクソンにおいて笑いの社会性は平衡に依拠している。ここでは両著作における平衡の扱いをたどりながら、おかしさの内実に迫るベルクソンの議論を検討する。

2-1 『物質と記憶』における平衡

身体として環境のうちに現前し、生きるということをどのように理解

すればよいだろうか。ベルクソンは、身体と物質の他の部分とを区別することから出発しない。したがって、身体を意識の担い手あるいは精神の座として最初から特権視することを認めない。しかし、そのような立場を取るとき、身体の地位をめぐる大きな困難が生じる。というのも、その場合、一方では身体は他の物体と全く同じ資格で並び立つ一つの物体に過ぎないのだが、他方身体は何らかの仕方では物質の他の部分から際立っていない（そうでなければ身体として名指すことすらできない）からである。

物質の一部であることと、物質の中で際立ったあり方をする。この二つの条件をとともに満たす身体のあり方を、ベルクソンは「感覚運動系 *système sensori-moteur*」（MM 169）と呼んだ。他の諸物体が、外部から与えられた作用に決められた仕方では反作用を返すのに対し、生物の身体においては作用を感覚として受け取る機能と、受け取った作用を運動として返す機能が、区別されつつ「未分離の全体」（MM 153）をなしている。これが感覚運動系である。感覚は即座に運動へと延長されるのではなく、運動として返す仕方を「ある程度選んでいるように見える」（MM 14）。こうして、身体は物質のうちにありながら物質に対して独自の働きかけをするものと理解される。

感覚と運動との間に成り立つ関係によって、身体のみが決定される。そして、身体のみによって、われわれと周囲の物質世界との間に関係が確立される。これらの関係のことをベルクソンは「平衡」と呼ぶ。生きるためには感覚と運動の間で、そして身体と環境の間で常によい平衡が保たれていなければならない。身体は絶えず外部からの作用にさらされるよりほかに、そして常に「適切な反応」（MM 172, 185, 194）で応じることを求められる。受容と反応との連鎖はまた、要求と応答との連鎖でもある。適切な反応によって環境との間に平衡を取ることは、生命に後から付け加えられた要求ではなく、生命の「一般的目的」（MM 89）である。したがって、身体は「適切な反応」を取ることを求められる

という以外の仕方ではそもそもありえない。

2-2 『笑い』における平衡

『笑い』では同じ図式を引き継ぎながら、「適切な反応」に関してもう少し踏み込んだ記述がなされている。ここで社会性が明確な形を取る。

生命と社会がわれわれの一人ひとりに要求するのは、常に覚醒した注意であり、それによって現在の状況の輪郭が見分けられる。それはさらに身体と精神のある種の弾力性であり、この弾力性によってわれわれは現在の状況へ適応できる状態になる。……しかし、社会はさらに別のことを要求する。ただ生きるだけでは十分でない。よく生きることが大切である。……そしてまた社会が懸念しなければならないのは、社会を構成する成員が相互の意志をますます正確に通じさせ、ますます精緻な平衡を目指すのではなく、この平衡の基本的条件を尊重するだけで満足してしまうことである。……社会は人と人とが相互に絶えざる適応の努力をするよう求めている。(R 14-5)

「平衡の基本的条件を尊重する」こと、あるいは「生きる」とことと「ますます精緻な平衡を目指す」こと、あるいは「よく生きる」ことを否定的な面から比較してみよう。自らの健康や生命、そして時には社会の成り立ち自体に危機をもたらすような欠陥を抱える者は「根本的な」(R 14)不適応を示す。彼らはどのような環境であっても、「他の人々と共に生きる」(R 14) ことそのものが難しいだろう。「平衡の基本的条件」がこうした水準であるのに対し、「ますます精緻な平衡」は、周囲の事物や人、つまり社会が変化していくのに合わせて「自分を正確に調整する *se règle exactement*」(R 140) 努力によって維持される。後者のより高度な平衡において問題とされるのは、適応するための能力をあらかじめ備えているこ

とではない。ここでは、絶えず変転する状況に合わせて適応の努力をし続ける「柔軟性 *souplesse*」(R 11) が求められている。そうした要求に反し、われわれは時として「身についた習慣の安易な自動現象」(R 14) によって状況に対応してしまう。このような「硬直性 *raideur*」(R 11) が平衡を乱す。状況に合わない自動現象に身を任せてしまうのは、自分が何を求められているのかも、自分が周囲にどのように映っているかも自覚していないからだ (R 112-3)。こうした注意の欠如は「放心 *distraction*」(R9) と呼ばれる。放心する人が示すのは、社会との折り合いをつけることができない「非社会性」(R 106) である。「硬直性、自動運動、放心、非社会性、これらすべてがまじりあい、そこから性格のおかしさが形成される」(R 103)。

人は社会への適応、社会との平衡を求められるという以外での仕方では存在できない。人と社会との間には、こうした要求をするものとされるものとの関係を保つ力が働いているはずである。社会に深刻な被害をもたらす反社会的な不適応は「おのずと排除される」(R 14) だろう。非社会的な不適応に関してはどうか。状況に適応していない人が示しているのは、意図を伴った反社会性ではない。硬直性は自覚のなさ由来するのだから、社会の側が彼に対して取りうる最良の策は、彼を社会から排除することではなく、彼に自らのおかしさを理解させることである。笑いはまさにこの役割を担う。笑いは相手に「屈辱を与え」(R 150)「不安を抱かせる」(R 15) ような「社会的身ぶり」(*ibid*)、一言でいえば「懲罰」(R 16) に他ならない。だが、目的は罰すること自体にあるのではない。

……笑うべき欠点の持ち主は、自らが笑われていると知るや否や、少なくとも外面的には自らを取り繕おうとする。……それ〔笑い〕は、われわれがあるべき姿、おそろくいつかは本当にそうなるであろう姿に見えるよう、今すぐ努力するよう促すのである (R 13)。

こうして、相手が自らのおかしさに気づくよう仕向け、態度を「矯正する」(R 13) ことが笑いの社会的役割である。

2-3 生命的なものと機械的なもの

硬直性、自動運動はどのような形で姿を現すのか。ベルクソンが提示する無数の例から一つだけ取り上げよう。演説家が話の途中で同じ身ぶりを繰り返すのを見たとき、われわれは思わず笑ってしまう。それは演説の内容が「絶えず変化する」(R 24) 生きた思考を表現しており、それに伴う身体の動きも「生き生きとしたもの」(*ibid*) でなければならないのに、同じ身ぶりを繰り返す身体は機械のようにしか見えないからだ。「それはもはや生命ではなく、生命の中に据え付けられ、生命を模倣する自動作用である。それこそがおかしいのである」(R 24-5)。

この「生きているものの上に貼り付けられた *appliqué* 機械的なもの」(R 29, 38, 44) ²が、おかしさの「中心的イマージュ」(R 29, 43) である。「貼り付けられた」という表現からも理解されるように、生命的なものと機械的なものはともに現れるが、一つになっているわけではない。そして、笑いの社会的機能にとってはそのことが重要である。

人間は……放心に似た性向によってのみ、自分と一体化せずに寄生虫のような仕方を取りついて生きるものによってのみ笑いを誘う。
だからこそ、この性向は外から観察されるし、矯正されうるのである。(R 130)

笑いの目的が矯正である以上、笑うことのできる欠点は矯正可能でなければならないし、矯正可能であるためには観察できるのでなければならない。また人格のうちに、あるいは生命のうちに深く入り込んでいてはならない。

だが、このような説明は「社会的ふるまい」としての笑いに傾きすぎしており、われわれ一人ひとりが何かにおかしみを感じ、笑うときの実感とはかけ離れていないだろうか。ベルクソン自身が、矯正するという「底意」は「われわれ自身のものではないにしても、社会がわれわれの代わりに持つものである」(R 104、強調は引用者)と述べるだけに、個人が自分でも意識しないままに、他者のふるまいを矯正するという社会的機能をどのようにして果たすのか、明らかにしなければならない。そこで、次節では笑いの社会的機能が果たされるために必要とされる個人の経験と資質について検討する。われわれの理解では、本稿全体のテーマである笑いの「苦み」も、笑いが社会的機能を果たすときの各個人(笑い手)の動向に関わっている。

第3節 笑いの「苦み」について

以下、われわれが何かを笑うときに経験するとベルクソンが考えていることを明らかにしつつ、笑いの「苦み」に迫る。しかし、さしあたりここで注目するのは『笑い』本文の末尾に登場する、「苦み」とは別の概念である。

それ〔笑い〕は陽気なのである *C'est de la gaiété*。しかし、それを拾い集めて味わおうとする哲学者は、ごくわずかな量であるが、しばしばそこにいくらかの苦みを見出すだろう。(R 153)

「苦み」は、「陽気さ *gaiété*」とともに見いだされるものとされる。そして「苦み」と同様、「陽気さ」についても『笑い』の最後のセクション(R 147-153)でのみ触れられている。あたかも、両者は対をなすかのようなものである。だが、具体的にどのような関係が想定されているのか、必ずしも明らかではない。われわれは、ベルクソンの記述を手掛かりとしながら、

笑うという行為のうちで二つの局面を区別する。そして、その各々に対応するものとして「陽気さ」と「苦み」を位置づける。

3-1 おかしなものへの関心

笑いが共感の不在を条件としていることはすでに述べた。われわれは何か心動かされている限り、そこにおかしさを見出すことができない(R 106)。しかし、ある特定の対象を笑うことができるためには、少なくとも他のものから区別してその対象に注目する程度には心を寄せなければならないだろう。したがって、何らかの関心が必要である。笑いの対象に向けられる関心とはどのようなものだろうか。ベルクソンは以下のように述べる。

人間的事柄の生き生きとした連続のうちに、時として侵入者のように見いだされる硬直した機械仕掛けに、われわれはまったく特別な関心 *intérêt tout particulier* を有している。なぜなら、それは生の放心のようなものだからである。……もし人々が生に対して常に注意深くあれば、もしわれわれが他人と、そして自分自身と常に接触を保っていれば、バネや糸によってわれわれの内部に生み出されるように見えるものなど何もないだろう。おかしさとは人物を物に似せてしまうこうした側面であり、人間的な出来事が一種独特な硬直性によって、純然たる機械仕掛けや自動作用のような、要するに生命を持たない運動を模倣する様子である。したがっておかしさは、即座に矯正されるよう求められる個人的、あるいは集団的な不完全性を表している。(R 66-7、強調はベルクソン)

矯正が「即座に」なされるよう求められるのであれば、対象は当初から「矯正されるべきもの」として現われるはずである。この点からすると、

「特別な関心」とは対象の覚知と矯正の意図が一体化したものであるように見える。しかし、ベルクソンはこうした矯正が「意識的な反省によってではなく、自然の道筋によってなされる」(R 151)とも述べている。懲罰と矯正は笑い手の一人ひとりが表立って意識するものではなく、社会が向ける「無意識の底意」(R 130)である。したがって、「特別な関心」のうちには、何か別の要素が含まれているのでなければならない。

3-2 つかの間の共感と社会への回帰

おかしなものに直面したときわれわれが抱く最初の印象としてベルクソンが記述するのは「共感」である。これは非常に逆説的に響く。共感の不在を条件として起きるはずの笑いが共感によって始まるとはどのようなことだろうか。

おかしな人物に対して、われわれはしばしばまず物質的に共感を覚える *sympathiser matériellement*。私が言いたいのは、われわれはごく短い間その人の立場に身を置き、その人の身ぶり、言葉 *paroles*、行為を採り入れるということであり、その人の中の笑いを誘うものを楽しみながら、想像のうちで、われわれと一緒に楽しんでくれるよう誘うということである。われわれはまず彼を仲間として扱うのである。したがって、笑い手には少なくとも見かけ上の善良さ、愛すべきほがらかさ *jovialité aimable* があり、これを考慮に入れないのは間違いだろう。(R 148)

社会が求める適応は、絶えざる緊張と努力を要求する。われわれがおかしな人物に共感を覚えるのは、彼の「放心」がそのような緊張からの解放を示しているように見えるからである。それは、常に適応を求める「社会に対する無作法」(R 148)を示すとともに、社会からの「自由」(*ibid*)

を体現しており、われわれはそうした姿勢を「想像のうちで」共有する。そのことが「生きることの労苦から休息させてくれる」(R 150)。笑いの「ほがらかさ」は、彼を肯定することによって自分もまた「生に向けられるべき注意を弛める」(R 149) ことに由来する。笑いはこうした「弛緩運動 *mouvement de détente*」(R 148) から始まるのだ。これが笑いの第一の局面である。

しかし、この共感「消え去りやすい」(R 150) ものであり、したがって長くは続かない。休息はひと時のものであるからこそ休息たりえるのである。そして、ひとたび共感が失われれば、われわれはいったん離れた社会の側に復帰する。そのとき、おかしな人が示す「無作法」は看過しがたいものになる。社会が求める「相互適応」(R 15) の努力を欠いた者は、こちらから努力を差し向ける対象ではもはやない。「相互の意志をますます正確に通じさせ」(*ibid*) るような相手とはみなされない。笑うという行為そのものが、たとえ無意識のうちにであれ、矯正や懲罰として機能するのはこのためだろう。要するに、それは「真剣に」(R 110) 取り合わないという態度である。「……無作法に対して、社会は笑いで返すのだが、笑いはよりひどい無作法である」(R 148)。これが第二の局面に他ならない。

3-3 笑いの「苦み」

共感の不在とは、一度は抱かれた共感が断ち切られた結果である。そして、共感に伴っていた「陽気さ」「ほがらかさ」が失われると同時に「悪意 *méchanceté*」(R 151) が顔をのぞかせる。この第二の局面に見出される笑いの「苦み」とはどのようなものだろうか。ベルクソンは、それを「エゴイズム」「ペシミズム」として記述する。

弛緩や伝播の運動は笑いの序曲でしかなく、笑い手はすぐに自分のう

ちへ立ち戻り、程度の差はあれ傲慢に自分自身を肯定し、他人の人格を自分が糸引く操り人形のように見なす傾向がある、ということが見いだされる。しかも、こうしたうぬぼれのうちに、われわれは少しのエゴイズムをすぐに見抜くし、そのエゴイズムそれ自体の背後には、さらに自発的でなく、さらに苦い何か、なんだかよくわからない生まれかけのペシミズムをすぐに見抜く。このペシミズムは笑い手が自らの笑いについて考えれば考えるほど明確に姿を現す。(R 151-2)

この「エゴイズム」と「ペシミズム」(とりわけ後者)について、ベルクソンは多くを語っていない。しかし、前項で触れた笑いの二つの局面を考慮すれば、その内実はある程度明らかにできるだろう。

「エゴイズム」から考えてみよう。それは、直接的には「悪意」あるいは「相手をからかう気持ち *malice*」(R 151)を指すだろう。それらは、自然が「人間の中で最も善良な者にさえ」(*ibid*)残しておいたものである。しかし、既に見たように、それらが発動するのはつかの間の共感を経た後のことである。笑いは、自分自身が一度は共感した相手に手のひらを返し、まともに取り合わないことによって成り立つ。相手が示す硬直性・自動性を、ほんの一瞬の間、社会からの自由として肯定的にとらえたのち、一転して「自分が糸引く操り人形」のようなものとして下に見る。その時、笑い手は、一度共有した立場から自分だけいち早く抜け出し、自己を守っているのである。「悪意」が、こうした変わり身の早さ、保身として姿を現すことをこそ、ベルクソンは「エゴイズム」と呼んでいると考えられる。

「ペシミズム」のほうはどうだろうか。われわれはふつう笑いを肯定的にとらえている。「……われわれは笑うのが好きであり、[笑うための]口実はわれわれにとってどんなものでもよい」(R 156)のである。それは、笑いが「陽気さ」「ほがらかさ」をもたらすと考えられているからに他ならない。しかし、それらは「笑いの序曲」に過ぎない。笑いは、共感が絶たれ、共感に伴っていた「ほがらかさ」が失われるということを条件とし

て初めて成立する。残るのは、相手が示す自動運動のうちに、自分が自由にできる「操り人形」の姿を見出すことによって得られる意地の悪い「快樂 plaisir」(R 12)である。笑いを子細に観察すればするほど、求めているものはあらかじめ失われていたことが明らかになる。この意味において、笑いは根本的に虚しいものである。この根本的な虚しさに気づいた者の味わう「ペンミズム」こそが笑いの「苦み」であろう。

結 論

ベルクソンが笑いのうちに潜む「苦み」を示して記述を終えた後、残されたわれわれはどうすべきだろうか。彼が触れなかった笑いに活路を見出そうとする試みはある。表層的なおかしさにではなく、「深い情動に由来する」「喜ばしい笑い *rire joyeux*」³、有限な社会を活性化するのに寄与するものではなく、「〈超社会的 (*supra-sociale*) な平和」に満たされた笑い」⁴といったものが提示されている。しかし、どちらもその具体的な形は見定めがたい。われわれとしては、『笑い』のテキストに踏みとどまって、おかしさが生み出す笑いについてのベルクソンの議論が、本当におかしさの可能性を汲みつくしているか検討し直すことにも価値があると考えている。

(にしやま・てるお 慶應義塾大学文学部非常勤講師)

Amertume du rire chez Bergson

Teruo NISHIYAMA

À la fin *du rire*, Bergson mentionne l'amertume du rire. Cette brusque introduction de l'aspect négatif du rire déconcerte les lecteurs parce que la

discussion se termine sans en préciser les détails. Et comme ses œuvres postérieures n'en disent rien, nous ne savons pas clairement ce qu'il en pense. Pourquoi le rire, essentiellement gai, devient-il amer? Pour répondre à cette question, nous observerons de près la méthode de Bergson. Il insiste sur la fonction sociale du rire. A vrai dire, il n'est pas toujours aisé de comprendre pourquoi on rit et de quoi on rit. Pour lui, le rire est un geste social, pas individuel. Nous montrerons que la socialité du rire et l'amertume du rire, son aspect négatif, sont en fait indivisibles.

* ベルクソンの著作からの引用は、以下の略号の後に頁数を付した（*Mélanges* 以外は *Quadrige* 版）。

MM: *Matière et mémoire*, 1896

R: *Le Rire*, 1900

PM: *La pensée et le mouvant*, 1934

- 1 『笑い』と直観との関係については、増田 [2016], pp.298-302 を参照。
- 2 Boullant は、「生きているものに貼り付けられた機械的なもの」が、幻想文学や SF でも扱われており、それらにおいては、笑いではなく恐れや不安、さらにはフロイトが「不気味」と呼んだ感情の要因にもなっていると指摘する（Boullant [1994], p.113）。この指摘が正しければ、ベルクソンが提示する「中心的イマージュ」は、当のベルクソンが批判した「われわれに笑う気を起こさせない多くのケースにも適用されるような定義」になってしまうだろう。この点は検討が必要である。
- 3 Worms [2007], p.13
- 4 石井[2007], p.36

参考文献

- 石井敏夫 [2007] 『ベルクソン化の極北』理想社
- 増田靖彦 [2016] 「解説」（ベルクソン、増田靖彦訳『笑い』光文社 268-307 頁）
- Worms, Frédéric [2007] “Présentation” in Bergson *Le rire*, PUF, pp.5-13.
- Boullant, François [1994] *Henri Bergson, Le Rire*, Bertrand-Lacoste.